

## 尼雅川々床と尼雅遺跡の関連性について

真田 康道

### 【抄 録】

尼雅遺跡学術調査は、1988以来9回に亘って日中共同で実施されてきた。その間に大きな発見や学術的研究成果を上げた。

本論文では、現地調査でなければわからない尼雅川々床と尼雅遺跡との関連性に視点を当て、その間に得られた新しい知見、すなわち、尼雅北方に新たに発見された「尼雅北方新遺跡」との関連性、さらにフランスのスポット衛星写真を活用して考察した。衛星写真では160km以上の範囲で、現在も人々が暮らすオアシス〈民豊〉やカパカスカン村、タマチャ集落、そしてタマチャ集落の西に巨大な岩石隆起帯〈民豊隆起帯〉の存在、そこから北は植生が急速に衰えている事実、さらに北の尼雅遺跡最南端箇所あたりからは、地下水が尼雅川々床をはずれ北西に延びている事実。また、現地調査による尼雅遺跡内に於ける《Ancient Bridge》付近では古代の川や森林が遺跡の西側にずれている事実。さらに、《尼雅北方新遺跡》では、現在のオアシス民豊と尼雅遺跡と延長上にあるが、尼雅川々床は西にそれている事実。また、北方新遺跡と尼雅遺跡の境界の設定。北方新遺跡から収集した文物、北方遺跡内の遺構の一部をカーボン分析結果などの比較から北方新遺跡は、尼雅遺跡より遡る別の遺跡であること。尼雅川々床は北方新遺跡の方角から西に振っている事実。これらの事実からして、尼雅川々床や川の流れ、それに伴う森林地帯、地下水などが、長い年月の間に順次西の方角に傾いていった事実。さらに、民豊隆起帯が尼雅川と接する地点で、衛星写真によると植生が急速に衰えている事実から、上記の川床に見られる変化は、《民豊隆起帯》を原因として生じたものではないか、さらに尼雅滅亡の原因についてもこの隆起帯が大きく関わっている可能性をスタインの報告書も交えながら考察した。

キーワード 尼雅遺跡 北方新遺跡 尼雅川々床 民豊隆起帯 精絶国

## 第1章 尼雅川々床に見る遺跡群

### 第1節 日中共同調査

尼雅遺跡は、崑崙山脈の氷河に水源を発して、世界第二の大砂漠、タクマラカン砂漠に流れ込む尼雅川の川床上に存在する遺跡である。この川床の域内では、古代には豊かな森林が繁茂し、人びとによって牧畜、果樹園、耕作が営まれ、あるいは、北区域では鉄や銅の製品、工芸品などを生産した、かなり大規模な工房 (93A9南方工房址) も存在していた西域南道におけるオアシス国家であった。<sup>(1)</sup>しかし、最大でもせいぜい5~7km程度の川幅を持つ尼雅川々床であって、そこから一歩出ると東西数キロ、南北20km以上にも達する大砂丘が幾重にも重なっている砂漠である。現在われわれが目にする、自然の風景はおそらく尼雅の住人たちとさほど変わらなかつたであろう。そして人々が住む居住区とそれを取りまく環境は、今も昔もすべて崑崙山脈に発する細長い川床に依存している。

1988年、小島康<sup>やすたか</sup>氏と新疆文化庁合同調査で始まった“日中共同尼雅遺跡学術調査”事業は、現地調査だけでも9回に及ぶまさに大プロジェクトであった。筆者は、第二回目の調査、すなわち1990年度から龍谷大学の井ノ口泰淳教授と共に参加することになった。それ以後97年度まで連続8回現地調査に参加する機会が与えられ、主として遺跡分布調査に従事してきた。尼雅遺跡分布調査で活用したのは、つぎの三つである。

(i) 携帯用GPS機器 (Global Positioning System, 全地球測位システム) この機器は、砂漠のような目標物の乏しい地形ではたいへん貴重な機器であった。この種のGPSは、100m以内の誤差が生じるが、遺跡を発見してその位置を一度測れば、次回以降ほぼ確実にたどり着くことができる。後には誤差が数十センチの機種も導入されて精密な測定も行われた。

(ii) スタインが作成した尼雅遺跡地図と住居等遺跡の模式図の活用。スタインの遺跡地図には4種あるが、特に分布地図“REVISED SITE PLAN of ANCIENT SITE BEYOND NIYA RIVER”<sup>(3)</sup> (「改訂版尼雅遺跡地図」) と住居の模式図を基に遺跡を同定し、GPSで位置を記録し新たな遺跡番号を付加していった。

(iii) フランスのSPOT衛星写真の活用。この衛星の解像度では、遺跡を同定することはできないが、GPSで測定した位置を地図上や衛星写真に落とすことができる。

困難な砂漠の遺跡分布調査に、こうしたスタインの成果や最新の機器の活用は大きな武器となった。

スタインの時代には全く知られていなかった仏塔位置から45kmほほ真北にある新遺跡を93年度に確認し、現地調査を実施した。新遺跡の情報は、現在タリム盆地 (タクマラカン砂漠と周辺地域を含めた盆地一帯) で進められている石油開発の一環として、新疆ウイグル自治区の水文部門 (砂漠の砂質や水質を観測する部門) と地質部門<sup>(4)</sup>が古代尼雅川々床の上流地域を調査中発見し、情報をもたらしてくれた。この情報をもとに93年度と96年度に日中共同隊が調査を行

った。収集した文物から、尼雅遺跡より時代が遡る遺跡であることが判明した。<sup>(5)</sup> 以上述べた新しい器機と情報を活用して得られた尼雅遺跡と尼雅川々床の関連性について考察する。

## 第2節 尼雅川概観

SPOT 衛星写真から作成した [第1図] には、最北の北方新遺跡から尼雅遺跡、さらに人々が生活する大馬札村<sup>タマチャ</sup>や尼雅川流域で最大のオアシス民豊<sup>ミンファン</sup>まで、南北160kmの影像が収まっている。衛星写真は上が真北を、そして下が真南方向を表示している。また、写真右寄りに走る黒い線は、96年に開通したコルラ⇄民豊間を結ぶ砂漠横断道路である。実際は判別しづらいので線を強めてある。

最南端に位置する民豊<sup>ミンファン</sup>から順次、尼雅川々床に沿って地形的特徴を見て行くことにする。民豊の街は、一部が写真の底辺に接し、欠けているが楕円形をなしている。小さな白い点は、拡大した [第2図] で見ると長方形に区画整理された居住区と街路であることが分かる。まず、画面の南北方向、正確には北北東から南南西に沿って多数の縦縞の模様がある。これらはタクマラカン砂漠の大砂丘であって、常に東西方向に風が吹いているために形成された波紋である。しかし、南の区域では、砂漠の端となるので風の乱れによって風紋が生じている。尼雅川々床も鮮明に写し出されている。川床は民豊<sup>ミンファン</sup>から大馬札<sup>タマチャ</sup>まで多少の蛇行はしているが、ほぼ南から北方向に砂漠の内部に向かって延びている。しかし、この川床は、[第1図] に見られるように大馬札聖堂付近で西方向に幾分折れ曲がっている。尼雅遺跡は、[第1図] および [第5図] に見られる通り、大馬札から北方向、直線距離にして14.2~35.5kmの範囲内に納まる川床上に住居址94戸・寺院址4箇所・墓地12箇所・炉などの工房跡17箇所・果樹園5箇所・橋状遺構・家畜小屋・並木&垣根跡、古城跡(尼雅遺跡以前の遺構?)、建築部材散乱地などが点在している。<sup>(6)</sup> さらに北には、北方新遺跡が北北西に傾いた現在の尼雅川々床とは異なった方向、すなわち民豊から真北の方向に存在する。これらは、[第1図] および [第5図] に示してある。

## 第2章 精絶国と尼雅遺跡

### 第1節 漢書西域伝の記述

日中共同学術調査として、9回に亘って実施した遺跡をわれわれ日中共同尼雅尼雅学術調査隊は、《尼雅遺跡》と呼んでいる。しかし、この遺跡に関係すると思われる呼称には、さまざまがある。中国の歴史書には《精絶国》とあり、またスタインが現地で収集したカラーシュティン<sup>チヤドータ</sup><sup>(7)</sup> 木簡では、《Caḍ'ota》として記載されている。さらに、玄奘三蔵の『大唐西域記』には《尼婁》という王国名の記載がある。<sup>(8)</sup> さらに尼雅遺跡の発見者オーレル・スタインは、彼の報告書『古代コータン』(“Ancient Khotan”)をはじめとする尼雅遺跡調査報告書において“Niya Site”、すなわち、《尼雅遺跡》と名づけている。このようにさまざまな呼称が存在す

るが、これらを一度整理して考える必要がある。さらに、これらの個々の名称がはたして同一遺跡を指すのかどうかについても検証する必要がある。

まず、中国の歴史書から検討する。『漢書』西域伝に以下のごとき記述がある。

精絶国の王、精絶城を治む。長安を去ること八千八百二十里。戸四百八十。口三千三百六十。勝兵五百人精絶の都尉・左右の将・譯長、各一人。北都護の治所に至る。二千七百二十三里。南に戎盧國に至る。四日の行。地阨隘なり。西扞彌に通ず。四百六十里。<sup>(9)</sup>

尼雅遺跡は古代のオアシス王国、〈精絶国〉にスタインによって比定されたが、その事情については後述する。衛星写真〔第5図〕に見られるとおり、尼雅川々床上の一定範囲に、戸数480、人口3,360、将兵500を構成するオアシス国家が存在していたことになる。しかし、尼雅遺跡が尼雅川々床を前漢時代から滅亡の時期に至るまで移動することなく同一箇所にあったことは確実である。<sup>(10)</sup>

## 第2節 精絶国の位置

スタインは、1901年1月27日に尼雅遺跡の仏塔に到達した。そこにキャンプを設営し、翌28日にN.1遺跡(93A18)に到達し、早速大量のカローシュティー木簡を手に入れることに成功した。3回の尼雅遺跡調査で、実に700枚以上の木簡を収集し、ヨーロッパに持ち帰り、アンドリュウ、ラプソン、シャヴァンヌ等のすぐれた学者によって解明されることになった。

さて、スタインは尼雅遺跡において学問的宝の山を掘り当てたのであるが、彼が尼雅遺跡を古代の《精絶国》であると比定したのは、尼雅遺跡から持ち帰った木簡の解読がある程度進んだ頃の第二次探検(1906年)の成果をまとめた報告書“Serindia”(1921年刊)に於いてである。彼は尼雅遺跡中の住居址としては最も北に位置するN.13(93A10)の $\frac{1}{4}$ マイル(400m)(GPS測定によると両者の距離は460m)南西にある、大きな構えをもつ住居址N.14(93A9)のゴミ捨て場の中央に十数枚の小さな荷札のような細長い木片を発見した。その内8枚は見事な筆跡を持つ完全な形状を保った漢文本簡であった。それらをヨーロッパに持ち帰って、シャヴァンヌ(M. Chavannes)による翻訳と学問的分析結果がなされた。それによると、これらの小さな木簡は、地方の王家の人びとが、恐らく新年の祝い事の儀式において相互に行ったり、あるいは家臣から受け取ったりした宝石で造られた贈り物に付けられているものであることが判明した。<sup>(11)</sup>ところが、これらの木簡中で収集物番号〈N.xiv.iii. 10.〉の木簡には、王の妻の一人が且末〔出身〕の王女であると記してあった。<sup>(12)</sup>スタインは、尼雅遺跡を統治する王の妻の一人が且末であることから、且末と密接な関係があつて、さほど遠くないオアシス国家として、『漢書』西域伝などに述べる《精絶国》ではないか、と推定した。<sup>(13)</sup>この推理は当てを待っており、また尼雅から出土したカローシュティー木簡635号には、この王国を《Caḍ'ota》と表記していることが、精絶国の中国語発音“Ching-Chueh”と似ていることとも相俟って、スタインは尼雅遺跡は精絶国と比定したと云われる。<sup>(14)</sup>しかし、尼雅遺跡が中国史書に記する精絶

国であると推定するのは妥当であるといっても、明らかな証拠があったわけではない。ところが、1996年末に尼雅遺跡が精絶国であったとする決定的証拠が北京大学林梅村教授によって「漢代精絶国と尼雅遺址」と題する論文に発表された。<sup>(15)</sup> スタインは三回の公式探検が終了した後、1931年に非公式で再び尼雅遺跡に入って、以前(1906年第二次探検時)に漢文木簡を発見したN.14遺跡のiii号建物付近で、再度丹念に搜索して尼雅遺跡前期に属する〈N.14N-i〉遺構を発見し、そこからまとまった貴重な漢文木簡を発見した。<sup>(16)</sup> 尼雅遺跡が精絶国であるとする決定的証拠とは、さらに彼が6.6km南に下ったN.2住居址付近で収集した漢文木簡中に《精絶》の地名入り記載が確認されたことである。この漢文木簡は、出国時に厳しい官憲のチェックを受けながらも、スタインが撮影したその木簡の写真を持ち出すことに成功し、大英帝国に持ち帰ったものと思われる。林梅村教授によれば、1995年ロンドンの大英図書館の倉庫に保存されていた、これら漢文木簡の研究資料を見る機会が与えられたという。その内の一点に記載されていた内容は以下の如くである。

漢精絶王承書従(事) [以下残欠]<sup>(18)</sup>

注目すべきことは、林教授が指摘するように漢文木簡の《漢精絶王》という記載である。ここに紛れもなく、尼雅遺跡の国名《精絶》の文字を確認することができる。ところで、漢精絶王の文字入り漢文木簡が発見されたN.2住居址は、中央に広場の空間を中心に、およそ20戸の建物が環状に配置された、<sup>(19)</sup> 尼雅唯一の集合住居群を形成する遺跡である。N.2住居址群は、日本隊を中心に93年度に測量調査が行われ、<sup>(20)</sup> また、94・95の2年にわたって、その一部の発掘調査が実施されている。<sup>(21)</sup> この集落は、尼雅遺跡中重要な役割を持っていたと思われる仏塔からわずかに北東に500mの地点に位置しているから、当然仏塔との何らかの関係が予想されるが、しかし、その実態は未だ明らかにされていない。

### 第3節 衛星写真が捉える古代尼雅の位置

スタインが1901年に新遺跡を発見し、そこを《尼雅遺跡》(Niya Site)と命名したのは、古代そこに尼雅城や尼雅王国の所在地があったからではない。彼がダンダーン・ウイリクの調査を終えて、尼雅オアシスの街、すなわち現在の民豊オアシスに入ったとき、尼雅集落の村長から尼雅川の下流に遺跡の存在を知らされ、そこで収集したすばらしい保存状態の古代陶製壺を見た。<sup>(22)</sup> さらに、彼にとってもっと衝撃的で、探検家としての血をかき立てる幻の文書、《カローシュティー木簡》を手に入れたのである。<sup>(23)</sup> 彼は現地に行かずして、既に考古学的に途方もない価値の遺跡が実在するのを確信し、木簡の発見者イブラヒム青年をガイドに雇って1月23日に尼雅を出発し、27日現地に到着した。翌日の28日イブラヒムが案内して〈N.1〉(93 A18)住居址に行き、そこで膨大なカローシュティー木簡を手にする事となる。この成果は“*Ancient khotan*”(1907年刊行)に詳細に報告された。同書の中で、スタインは尼雅集落の彼方であって、尼雅川々床上に存在する新遺跡を、未だ古代の王国の名前も不明なままで

《Niya Site》、すなわち《尼雅遺跡》と発表した。このことは、後の研究者たちに少なからず混乱をもたらした、と私は考える。つまり、暫定的に名づけたこの遺跡が、後年スタインやシヤヴァンヌの努力によって中国史書に登場する《精絶国》と比定されると、その尼雅遺跡が紀元644年に玄奘が訪れた《尼壤城》とすり替えられてしまった。しかし、尼雅遺跡が尼壤であるという歴史的根拠は全く存在しない。それどころか、玄奘は尼壤城に関して以下のごとく記している。

媿摩川より東にして砂丘に入り、行くこと二百余里で尼壤城に至る。周囲三、四里で大きな沢地の中にある。沢地は温度・湿度共に高く渡渉は困難で、蘆が生い茂り道とはなく、ただ城への道をたどることにより通行できるだけである。それ故に往来するものはこの城を經由しない者はなく、そこで瞿薩旦那はここをその東境の関所としているのである。<sup>24)</sup>

《媿摩》は、現地名《Uzun-Tati》であって、訳者水谷真成氏の注に従えば「現在の和闐 Khotan と于闐 Keriya の中間にある策勒 Chira Bazar の北方の砂漠中」とある。尼壤城は沢地の中であって、蘆が生い茂りたいへん湿潤な地形の中にあることを伝えている。玄奘はコータンから、一度砂漠の中に入り、そこから尼壤を目指したのである。しかし、精絶国に比定されている尼雅遺跡は、4世紀にはすでに現在あるような廃墟と化していたと考えられている。したがって、そのことは異なる場所を玄奘は目指したことになる。最新のスポット衛星によって尼雅川の南部を撮影した画像〔第2図〕によれば、前述した通り、現在の大馬扎から民豊までが、今なお植物が繁茂する生きた川床を維持している。写真の最南部（写真の下部）に現在の民豊オアシスが確認される。そのすぐ上、すなわち民豊の街から北の一角は広大な湿原地帯を形成している。私はこの大湿原地帯が玄奘が描写した地形と良く一致すると考える。尼雅遺跡（Niya Site）の命名者であるスタイン自身も尼壤城を現在の民豊北の大湿原地に比定している。<sup>25)</sup>

現在の民豊はスタインが訪れた頃、すなわち中華民国以前には《尼雅》と呼ばれていたものであり、玄奘三蔵が訪れた王城が、民豊の近郷であることはむしろ自然である。しかし、『前漢書』の「[精絶国より]南に戎廬国に至る。四日の行。地阨 隘なり。西扞彌に通ず。四百六十里」と云う記述からすると、戎廬国が現在の民豊であり、玄奘が訪れた尼壤は《戎廬国》ということになる。

### 第3章 民豊隆起帯と川床の関連性

#### 第1節 衛星が捉えた民豊興隆帯

92年度にはじめて尼雅遺跡を宇宙から捉えたフランスのスポット衛星写真を見て、一番印象深く、そして不思議に思えたのは、川床と砂丘のシンプルな地形とは異なり、とてつもなく大きな地形が西から東に向かって延びており、南北に伸びる尼雅川々床と直角に接してあること

であった。その状況は〔第2図〕に示す通りである。後に知ったのであるが、その地形は民豊隆起帯（中国名；民豊興隆帯）であることが分かった。未だこの地形に関する専門書を入手していないのは残念であるが、しかし、尼雅川と民豊隆起帯が接している部分をよく見ると、大きな隆起帯は北から延びている大砂丘の南部末端の下を潜って東に現れている。そしてこの個所では鋭い鎌のように尖った先端部分を川床に突き刺している。川床も、くびれて極端に細くなり、幾分方向を西に傾けながら北に延びている。さらに、民豊から大馬扎まで濃い植生を示しているが、この地点を過ぎると急速に衰えてしまっている。川床が濃いカラーを示しているということは、その川床には豊かな地下水系が存在していることを示している。そうした生きた川床であればこそ地上には森や草が生い茂り、人間がそこに灌漑すれば豊かな耕作地が出現する。反対に、植生カラーが薄くなり、ついには無くなることにでもなれば、その場合川床の死を意味することになり、森や草原は枯死し、動物も人間も住めない死の世界となる。仏塔北の住居址付近〈92B2〉から収集された、土器片には首の部分が欠けた鹿の動物が描かれている。このことは、古代の尼雅川には鹿などの動物も存在した豊かな自然環境であったことがわかる。

前述した通り川床が民豊隆起帯と接する地点には大馬扎村<sup>タマチャ</sup>があり、集落の中にはイスラムのモスクがある。そして、村の東側には森が広がり上方に通じる参道があって、そこを少し上ると森は開け、褐色をした斜面が広がっている。その上方にかつて異教徒（仏教徒）と戦って戦死した英雄、イマーム・ジャファル・サーディックを祀る聖堂があり、熱心なイスラム教徒たちが訪れている。巡礼者の中には、この斜面を掘って岩塩を採取しているのを見かけたことがある。さらに、ここ以外に岩塩の採れる同じ褐色をした地層を大馬扎<sup>タマチャ</sup>の東方向で見たことがある。そこは96年に開通した砂漠横断道路の石油探査公社が自動車の燃料給油所として活用している場所となっている。この道路が開通してからは民豊からは、日中共同尼雅遺跡学術調査隊は尼雅川々床の悪路を避けて、舗装された新しい道路を北上し、この給油所からカパカスカン村に入るようになったのであるが、はからずもこの中継地として活用している場所は、大馬扎聖堂付近の地層と同じ褐色をしており、さらにここで現地の人びとが彼らの主食“ナン”を焼くために使用する岩塩を採取していた。この褐色をした地面は、97年に地質学者の石田志朗氏と半日を掛けてカパカスカン村から民豊隆起帯を歩いたことがある。その地面もまた褐色をした独特の地表に、さまざまな種類の少し丸みを帯びた小石が散らばっていた。こうしてみると、衛星によって認められる巨大な《民豊隆起帯》と砂丘を挟んでその東側に鋭く尼雅川の川床に突き刺さっている《イマーム・ジャファル・サーディック・マザール》の地点、さらに川床を越えた東側に位置する砂漠横断道路脇にある石油探査公社の燃料給油所の地面は同一であると推定できる。さらに、スポット衛星写真を注意深く見ると、この給油所以外にも川床東部の数個所で部分的に民豊隆起帯と同一であろうと認められる個所がある。したがって、民豊隆起帯は尼雅川の西側だけに存在するのではなく、大馬扎地点の川床の下を潜って東側に繋がっているとと思われる。

## 第2節 スタインの記述する川床と水流の関係

《民豊隆起帯》が、その名の通り今も隆起しているのであれば、衛星が捉える民豊隆起帯を境として南と北の川床に極端な植生カラーの変化は、この地形が係わっている可能性がある。この事実を補う現象として水流が川床をはずれ、西に振っているという事実である。すなわち、民豊興隆帯を境界として、その北側は急速に植生が減衰していることを衛星写真〔第2図〕によって明確に識別できるが、そのことは同時に大馬扎以北の川床上を流れる流水の消滅することのみでなく、地下水系の涸渇をも示唆している。すなわち、草木一本育たない死の川床の出現を意味する。こうした事実をスタインもすでに気づいていた。第一回西域探検で尼雅を発見した調査報告を記載している“Ancient Khotan”（『古代コータン』）中、尼雅調査に関する報告の末尾に次のように述べている。

遺跡が放棄されたのは、この川の流れが短縮したことに関わっているに違いないことが、その弁明が〔正しいのか、それとも誤っているのか〕どうであれ、まず最初にそうした憶測が頭をよぎるのである……<sup>(27)</sup>

また、彼は毎年川の洪水によって作られてきた肥沃土層の変化について次のような調査結果を記している。

ダンダーン・ウイリクとは対照的に、此处でその給水源に何が起こり得るのか明白である。それ〔すなわち、水源〕は、唯一尼雅川からもたらされていたのであるが、そのコースは今でも廃墟の遺跡（尼雅遺跡）に向かってまっすぐに運ばれているが、今では夏の洪水期間でさえも、後者〔すなわち、廃墟の遺跡〕の最南端地点から7乃至8マイル（11.3—12.9\*<sup>(28)</sup>）で完全に止まっている。わたくしが発掘調査した最北端の建築物の遺跡〔N.8〕と最近川の末端近くに存在する〔かつて〕洪水があった層の切り通し箇所との直線距離を測ってみると、後者〔すなわち、洪水〕のためにできた肥沃土の帯状区域が、遺跡が放棄されて以後大凡15マイル（24\*<sup>(28)</sup>）も後退していることが判明した。

スタインのこの文中で、後者〔尼雅遺跡中〕の最南端地点とは、第1回探検時にスタインが作成した民雅遺跡地図“SITE PLAN of ANCIENT SITE BEYOND NIYA RIVER”<sup>(29)</sup>中の〈N.Ⅲ〉住居址を指すものと思われる。また、尼雅遺跡中の最北端に位置する建物とは、N.8（92A11）住居址のことである。かつて精絶国として、この地域が機能していた頃には、おそらく毎年ある時期に川は氾濫して尼雅遺跡全体に肥沃土層の堆積をもたらしていたはずであるが、ある時代に24kmも肥沃土の地層が下流から上流に向かって後退していることを指摘している。そして、その川床の水流が後退した時期と尼雅遺跡が放棄された時期を同じ時期に重ねて考えているようである。N.8から現在知られている最南端の住居址〈92A15〉までの直線距離は、GPS測定器で計測すると19kmである。スタインの測定方法とわれわれの測定方法の結果が同じであるならば、最南端住居址よりさらに5.6km余り南に位置することになる。ところ



で、最南端住居址〈92A15〉から人が生活している最北端地点大馬扎村間の距離はGPSでは、14.3kmを示している。したがって、スタインが云う〈後退した肥沃土の堆積地層地点〉は、大馬扎村よりも8.7km程度北の地点を指している。このように、スタインは、まず、生きた川床の短縮を尼雅川の変化として挙げている。この記述は通常の水流通り大馬扎地点までであるが、川の氾濫時期には、〈92A15〉の南5.6kmまで到達することを指していると思われる。そして、さらに彼は重要な事実を記述している。

わたくしは測量士ラーム・シンにダローガ・イブラヒームを伴わせて、1月28日に後者〔尼雅川の末端〕の西方向箇所に偵察に赴かせ、以下のことを報告してきた。すなわち、彼は“《キャンプ93》地点の西約8マイル(12.9\*)”を行った〔砂丘と砂丘の間にある〕窪地に枯死した大量の胡楊(Toghrak)を見た。さらに約2マイル(3.2km)ほど過ぎると今もお生息している木々を見かけた”と。両方の観察は、或る時期に川が分岐して〔新しい〕川床がそちらの方向〔すなわち、枯死した胡楊や生きている木々を見かけた地点〕に辿って行った証拠として、現時点では受け入れられ得る<sup>80)</sup>。

彼は、1月27日に尼雅遺跡に到着して、翌日直ちにインドから連れてきた測量士ラーム・シンとガイドのイブラヒームを尼雅川々床より西方に偵察に出し、砂丘と砂丘の窪地に枯死した大量の胡楊と生きた胡楊の立木帯を発見したことを報告させている。すなわち、スタインは地下水系の水流通り川床からはずれ西の方向に逸れている事実を把握していた。

### 第3節 川床から西行する水流

スタインが部下の報告から得た地下水系が尼雅川々床をはずれて西行している情報を、現在のわたくしたちは、宇宙から俯瞰する衛星写真を利用して、つぶさに観察することができる。〔第3図〕は、スッポト衛星が捉えた植生カラーを活用して地下水の流れを矢印印で表示したものである。尼雅川は南の崑崙山脈に水源を発しているのだから、図の下が上流で水は下から上に向かって流れている。しかし、地表を流れる水は、大馬扎村(イマーム・ジャファル・サーディック聖堂を有する集落)の手前、すなわち、その南ですでに枯れてしまっている。したがって、植生カラーが示す箇所は、地下水がなお流れていることを示す箇所である。地下水系は、大馬扎村を過ぎてしばらく濃い植生カラーを発生させている。実際にこの辺りは胡楊の林が、まだ生い茂っている。しかし、北に進むにしたがって急速に樹木は減り、タマリスク(紅柳)の灌木が密生するゾーンに入る。不思議なことにカパカスカン周辺では水平な地面にタマリスクの灌木は群生するが、この周辺では、多分風の浸食作用によってタマリスクの灌木が生える周辺に三角錐の地形が作られて大きなものでは底辺が30m、高さ20mもある三角錐を造り上げる。スタインは、この三角錐をした地形を《タマリスク・コーン》(TAMARISK CONES)<sup>81)</sup>などと呼び、また中国名では《紅柳堆》と名づけられている。したがって、以下“タマリスク・コーン”と呼ぶことにする。尼雅遺跡の最南端区域では、無数の《タマリスク

ク・コーン》が密集して《タマリスク・コーン帯》を形成している。この《タマリスク・コーン帯》の中に住居址を中心に遺跡群を形成している、その遺跡群の一つ〈92A14〉住居址付近に認められる植生カラーは、川床の西端に南北に延びる大砂丘の西方向に超えて認められる。植生カラーは、さらにもっと外側の大砂丘を幾つか超えて徐々に西北の方向に延びている。すなわち、尼雅川の地下水系が川床から逸れて西行している。〔第3図〕では、↑で示してあるように、尼雅川の川床をはずれて延びているのが分かる。地下水系の西行をわれわれは、ただSPOT衛星写真で確認するだけでなく実際に現地に行って確認している。92年10月25日に日中共同尼雅学術調査隊の一部が〈92A14〉住居址の西方向にある大砂丘を超えて、砂丘と砂丘の谷間の個所、〈北緯:37°51′02.9″〉（東経:82°41′19.3″）地点に大きな胡楊が群生しているのを確認している。また、わたくしは、97年度に尼雅遺跡の最北端住居を越えた北側を調査した。10月13日、尼雅川々床の西側砂丘を幾つか越えた地点で胡楊の枯木林を南に下ると、青々と生い茂る胡楊林の中に入った。その場所は〈北緯:38°01′36.8″〉〈東経:82°35′13.9″〉から1km程度南に下った区域である。この状況は、スタインの部下、ラム・シーンとイブラヒームとが、尼雅川々床の西方を調査した前述の報告内容に似ており、そこはわれわれが到達した地下水系の南、すなわち、上流であると思われる。

#### 第4節 Ancient Bridge 付近を西行する尼雅川跡と古代森林帯

今まで見てきたように尼雅川々床を逸れて西行する地下水系が存在するのを確認できるが、尼雅川が西行している痕跡は、実はこのポイントに限ったことではない、さらに北側にも認められる。すなわち、スタインが〈Ancient Bridge〉（古代の橋）と名づけている付近である。〔第4図〕はスタインの“REVISED SITE PLAN OF ANCIENT SITE BEYOND NIYA RIVER”（改訂版尼雅遺跡地図）であるが、その下部に2本の点線で古代尼雅川の水流跡が印してある。この古代尼雅川は〈N.41〉（=93A23）住居址の近くを通過して、蛇行しながら尼雅遺跡からはずれ、川床端の砂丘の外側に流れ出ている。一方、SPOT衛星写真から作製した〔第3図〕では、黒の実線で示してある。尼雅川の水流跡は、今でもくっきりと残っている。

〔第3図〕によって遺跡内に見られる川跡を簡条書きにまとめると以下の通りである。

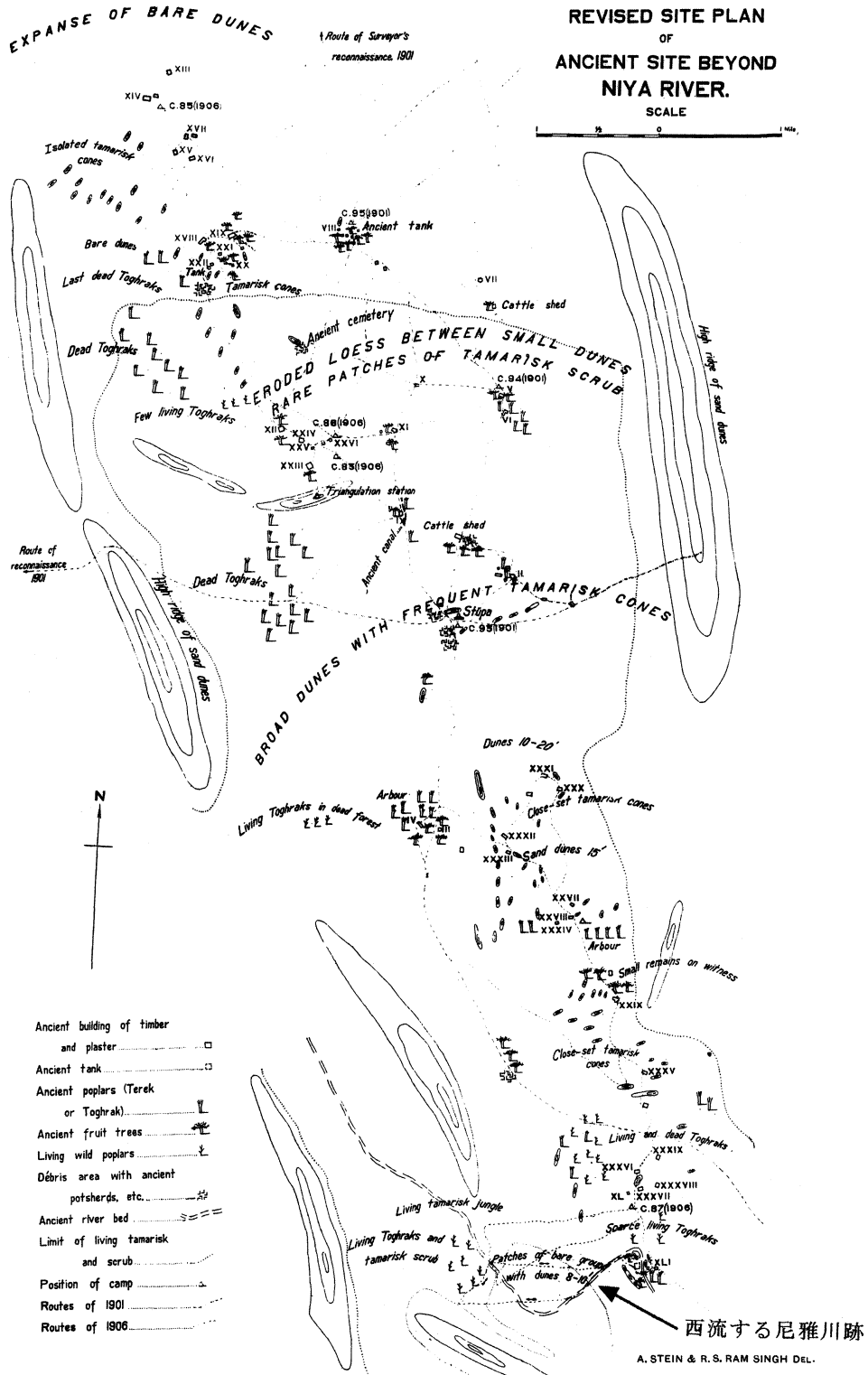
3本の実線の横にそれぞれ①、②、③の番号が付してある。つまり、かつて川は①→②→③へと流れていたのである。

##### （i）〔実線①の川跡〕

①の川跡付近に印してある黒点は、南（図の下方）から〈92A15〉、〈92A14〉、〈古代城壁〉の遺跡位置である。これらの付近を古代の川は、北流している。しかし、川は〈古代城壁〉の付近を抜けると次第に東に方向を向けて、胡楊が立ち枯れている古代森林の中に向かっている。

##### （ii）〔実線②の川跡〕

やがて川は Ancient Bridge の東約1km地点で北に向かう流れと西に向かう流れとの分水点



第4図 スタインの地図上に認められる、西流する尼雅川

に至る。西向きは、スタインが上記“REVISED SITE PLAN” [第4図] 上に印すとおり、タマリクス・コーン帯の中を西流し、川床との境界にある砂丘の切れ目を抜けて川床の外側を北に向かい、③の川跡につづいていると考えられる。

(iii) [実線③の川跡]

③の水流跡は、川床の外側にある二つの砂丘の谷を北流し、やがて、元の尼雅川々床上に戻っている。

一方 [第3図] に示す古代森林跡は網目模様で示してあるが、以下の通りである。

(i) 古代の森林は胡楊樹を中心として形成しており、川の流れの付近に密生していた。①の川跡、すなわち、尼雅遺跡南部では川の流れに沿って大きな胡楊樹が生えているが、大規模な森林帯を形成していない。むしろ、タマリスクコーン (紅柳堆) が東西方向 1 km 以上の幅で南北に延びている。

(ii) 一方、胡楊の森林跡は、②の分水境界点付近で大規模な密生した森林帯を形成している。これらの大部分は幹が立ち枯れの状態で森林の姿をとどめている。大人 3 人で手を繋ぐ程の大きさの胡楊木もある。古代森林は川跡を中心に幅広い帯状となって、西流する川と分かれて、しばらく北上して居る。この付近では、森林帯の中に尼雅住居址が認められる。N.45 (93A26)、<93A29>、<94A8> などの住居址である。しかし、森林帯は住居址の中を数キロほど北上すると、西方向に向きを変えて、尼雅川々床の西端に沿って北上している。南北に延びる尼雅遺跡の中央部に森林帯と接してある遺跡位置を示す黒点は、南 (下) から北 (上) に向かって順次 <N.3 (92B9)>、<97A1>、<93A12> の 3 つの住居址である。

④実線が示す川が北流と西流とに分岐している事実は、おそらく尼雅の住人に重大な影響をもたらしたであろう。と、いうのはこの個所の流れの分岐が、尼雅の南端で生じている地下水の西行よりも先に起きている。なぜなら、前者が後者よりも下流であるから、川の流れが有るときでなければならない。すなわち、時間的に先行して起こらなければこのような現象はあり得ないからである。

97年度に尼雅遺跡以北の川床を調査して分かったことは、尼雅川々床が徐々に西方向に傾いていること。さらに、川の水跡と森林も川床の西側に位置を保ちながら北に延びていることである。また、尼雅遺跡の最南端付近で地下水流が川床をはずれて西に向かっている現象は、以上の尼雅川々床で生じた最後の事件でなければならない。これらの現象の最も上流に位置しているからである。おそらく、地下水系の西流は <イマム・ジャファール・サディック聖堂> で起こった地殻変動と関連していると推定できる。そして、この大異変は尼雅遺跡の川床の死をもたらすことになった。ただこの異変が精絶国繁栄の時代に生じたかどうかということである。この点については、スタインの記述も交えて後述する。

## 第4章 北方遺跡と川床の関係

### 第1節 北方新遺跡と古代川床

北方新遺跡調査は、93年と96年の2回実施された。[第5図]に2度に亘る調査で文物が認められた個所に×印を付けた。それらの個所を表に整理すると以下ようになる。

「93・96年度 北方新遺跡位置一覧」

No	年度	緯度測定値	経度測定値	発見遺物
①	93	38°08'01.8"	82°43'33.9"	弦文折綾文壺；参照「図版編」46-24
②	93	38°12'48.3"	82°45'28.4"	陶片散乱
③	93	38°14'22.6"	82°45'54.8"	陶片散乱
④	93	38°15'57.0"	82°45'36.5"	陶片散乱
⑤	93	38°15'57.1"	82°46'31.5"	陶片散乱
⑥	93	38°16'45.8"	82°46'57.8"	石皿
⑦	93	38°16'48.5"	82°45'53.5"	陶片散乱
⑧	93	38°17'57.8"	82°46'48.5"	93BaseCamp地;古代川床上;土器陶片散乱
⑨	93	38°18'55.0"	82°47'21.7"	黒玉(カラ・タッシュ)石器採集；参照 ibd.44
⑩	96	38°19'31.2"	82°48'49.5"	首飾・石紡錘車・石皿・陶器；ibd.44,45
⑪	96	38°20'25.8"	82°48'57.0"	石皿・窯跡・陶器・黒石；参照；ibd.44,45
⑫	96	38°21'59.8"	82°48'21.6"	文様入り瓶；参照 ibd.45
⑬	96	38°22'02.7"	82°48'23.5"	青銅器・るつぼ・銅鐸
⑭	93	38°22'09.3"	82°48'01.6"	家畜糞の堆積・羊の骨(小屋跡か)
⑮	96	38°22'09.6"	82°48'16.2"	遺構発見波丘斜面柱、葦壁；ibd.43-1,2
⑯	未到	38°29'31"	82°51'55"	目標のひとつ；未到着

\*〔上記記載の発見物は「図版編」(『日中共同尼雅遺跡学術調査報告書』第2巻、1999年発行、所収)、参照〕

表の①から⑮までは、93、96年の2度にわたって調査した行程の中で、文物が散乱している地点、或いは文物を採集した地点、さらに⑮ポイントは96年に到達した最終地点で後述のごとく遺構が確認できた地点である。⑯ポイントは96年に到達目標地点としていたところであるが、ラクダでの探査では到達できなかった地点である。しかし、情報によればこのポイントにも遺跡の存在が伝えられている。

①ポイントは、93年に調査に向かう途中第1キャンプを設営した場所である。翌朝テントをたたんで出発した直後に、砂の上に保存状態の良い壺を発見した。その壺を収集したものが、『報告書第』2巻「図録編」に掲載されている<sup>33)</sup>。興味深いのはこの地点が尼雅遺跡最北端の住

居址 N.13 (93A10) から12°方向、わずか11.4km地点であって、そこは [第3図] に示すとおり現在の尼雅川々床の東端に位置する場所である。しかし、そのポイントから25°方向に向かって遺物の分布していることを示している。96年に北方遺跡に向かうルートとして、この方向よりも東を辿ったのであるが、東側のルートには遺物の分布は見られなかった。つまり、遺跡は東西に或る一定の幅を持って北方向に延びているのではないかと推定できる。①から⑫に向かって延びている遺物分布の帯をよく見ると南北に延びる砂丘を挟んで2本の川床がかすかに認められる。⑧ポイントで93年にベースキャンプを設営した地点は、明らかに古代の川床であった。さらに未確定ではあるが、⑩ポイントも古代の川床の近くであったのかもしれない。

⑮ポイントは、96年の調査に於ける最終地点で、ここで波丘の斜面から露出している遺構の一部を発見した。その状況は、2本の柱と部屋の外壁を構成していた小柱9本、さらに近くに倒れた同サイズのもの1本、小さな柱計10本、また、葦の壁材と自然木2本が見つかった<sup>64</sup>。ここは遺物の分布個所ではなく、北方新遺跡の一角であることを確認した点で極めて重要である。また、近くから炉跡や窯跡も確認されている。2000年3月21日に中国（新疆ウイグル自治区ウルムチ市）で開催された日中共同尼雅遺跡学術シンポジウムにおいて、京大木質科学研究所の伊東利夫教授は、⑮ポイントで採取した葦の14C分析による年代測定結果では、「1950年を基準として2840年前」と発表されている。すなわち、AD.2001年現在に於いては2891年前となるから、西暦紀元ではB.C.890年となる<sup>65</sup>。一方、北方遺跡で収集したさまざまな文物を分析した結果から、岳峰、于志勇両氏は、「これらの遺物の年代は青銅器時代に属し、今から3000年前後に遡る遺跡である」と推定している<sup>66</sup>。すなわち、B.C.1000年頃ということで、年代的に二つの研究結果はほぼ同時代と云ってよい。一般に鉄器使用の尼雅文化は、前漢時代から魏晋時代かそれ以後しばらくの時代、すなわち、B.C.2～A.D.4西紀の間と考えられているから、明らかに北方遺跡の文化は、尼雅遺跡を遡るものであり、両者は異なる文化、そしておそらく異なる民族圏の遺跡である。現代文明の利器、人工衛星が広範囲に捉えた尼雅川々床の写真に基づいて、川床が長い年月を経過する中で変化してきた事実をいろいろな観点から考察した。

尼雅川の上流から川床の変化について述べてきたが、川床の変化は実際には下流から上流、つまり北から南に向かった順次起こったはずである。したがって、もともと、(i) 民豊⇒カパスカン⇒大馬扎⇒尼雅遺跡⇒北方新遺跡と、ほぼ南から北に向かってまっすぐに延びていた尼雅川々床が、(ii) まず尼雅遺跡最北端のN.13住居址から十数キロ北の位置で西方向に振り、(iii) 次に〈Ancient Bridge〉付近で川が西に流れ川床をはずれ、また、森林も遺跡の西側に沿って北進する変化が生じた。恐らくこの変動は尼雅遺跡が〈精絶国〉として機能していた時代に発生したと考えられる。(iv) そして、さらに南の上流で、尼雅遺跡の最南端からさらに南にかけて地下水が川床をはずれて西北に流れている。(v) 最後に大馬扎の上流で地表面を流れる水が途絶えている。しかし、最後のふたつの現象は、おそらく同時に進行したと考えられる。

## 第2節 滅亡の原因と川床の関連性

スタインは、N.5寺院のゴミ捨て場を発掘する理由との関連で、それまで発掘してきた住居址、すなわち、N.1・N.2・N.3・N.4・N.7・N.8等に関する印象として、このように記している。

既述した限りの遺跡 [N.1・N.2・N.3・N.4・N.7・N.8 住居址] を発掘して分かった決定的事実は、以下の如くであった。すなわち、現存するこの遺跡に属する建物は、大部分が最後の居住者が清掃したか、あるいは、居住者が離れて間もなく、何らかの本質に関する価値のためか、あるいは実利的用途のために清掃してあった個人住居であるということである。

4つの住居址がすべてきれいに清掃されているという指摘は、歴史上はじめて尼雅遺跡の発掘を手がけたスタインならではの発言である。したがって、彼は遺物の乏しい尼雅遺跡では、ゴミ捨て場に当時の生活状況調査の証拠を見つける場所を求めたのである。彼のゴミ捨て場発掘の動機はともかくとして、最後の居住者が立ち去るときか、あるいは住居を一旦離れて間もなく、再び自分たちの住居に帰って清掃している、と云う事実は、尼雅の最後の様子をリアルに伝えている点で、尼雅オアシス（精絶国）が滅亡した理由にも関係する極めて重要な証言であると、わたしは考える。すなわち、最後の尼雅の住人たちは、侵入者に追われるように、あるいは殺戮が行われたり、住居を焼き払われるような差し迫った状況の中でここを立ち去ったのではない。尼雅を捨てる際に或る程度の時間的にも、あるいは心理的にも余裕さえあったことを伝えている。たとえ住人たちが大急ぎで去ったとしても、もう一度自分たちの住居に帰ることが可能な状況にあったと云うことである。しかし、それでも長年住み慣れた故郷を捨てざるを得ない深刻な別の理由があったことも、これら遺跡の最後の状況は語っている。そしてさらに、尼雅の住人たちが故郷をやむなく捨ててどこかに立ち去った後、スタインが入るまで他の住人たちが1700年間も、決して踏み入ることがなかった理由がなければならない。スタインは、その原因を尼雅川々床に求めようとしている。それは前述したとおり、毎年洪水によって生じる肥沃土の堆積する現象が、尼雅最北端の住居址から24kmも後退している事実と、尼雅遺跡最南端住居址の南5km地点で地下水が川床をはずれて西北方向に向かっていることも把握している。しかし、スタインは尼雅川水流が南に後退したことが尼雅文明（正確には精絶国）滅亡の主原因であると予想してはいるが、決定的原因を掌握できない状況下では、尼雅遺跡すなわち、精絶国滅亡の原因と断定することについて、なお慎重に留保している。<sup>87</sup>

## 第3節 尼雅滅亡に関する私見

生きた川床と云われる状態は、ただそこに川の水が認められるということではない。川床全域に地下水系がなければならない。地下水の存在があつて地表に森林や牧草地、耕作を可能

にし、人や動物が生息できる。かつての尼雅文明が栄えた頃には動植物をはぐくむ豊かな地下水流と川の流れが存在したことは間違いない。しかし、〈Ancient Bridge〉に認められるような尼雅川が川床をはずれて流れ出て、それに付随する森林帯も尼雅遺跡内の住居地帯を貫いてあるのではなく、むしろそこから外れた川床の西端を北上している現象は、住居地帯の地下水系に変化をもたらし、尼雅の住人たちの生活にかなりの支障をもたらしたはずである。それでも彼らは現状の生活を何とか維持していたと思われる。というのは、20km以上も南北に細く長く伸びている尼雅遺跡の住居に変化がないからである。すなわち、北部の一部の住居の生活がもうこれ以上不可能になったならば、〈Ancient Bridge〉付近かその南区域に移住が行われたであろう。しかし、そうした変化は一切認められていない。こうした状況下から云いする発言は、最後の瞬間に際して、尼雅遺跡（精絶国）の住人全員が一度に他の地域に移動したのであって、人びとが個々にそして徐々に移動したのではない。また、一度に全員が家族や家畜、家財をもって遠隔地に移動することも非常に困難だと思われる。もっと近郷の地、大馬扎村やカパカスカン村付近に緊急的に移住し、徐々に家財などを運び出し態勢を整えてから、最後にまたいつの日か住み慣れた住居に帰れることを願って部屋の清掃もして立ち去ったと考えるのが、全般的な状況からして最も妥当な結論だと考える。さらに、大馬扎付近に緊急避難的に移住した彼らは、どこかに立ち去るのではなく、結局そこに永住したのではなかろうか。おそらく、その可能性が高いであろう。97年にわたくしたち日中共同メンバーは、カパカスカン村やもっと上流をも、この村の住人で尼雅遺跡管理人でもある、アヴァバッキュレイ氏に案内してもらって、調査をしたけれども、精絶国<sup>38)</sup>に関係する遺跡は見つからなかった。しかし、『唐書』「列伝」中に〈精絶国〉の記述が見える<sup>39)</sup>ことは、それを裏付ける査証である。さらに、大馬扎の聖堂〈イマーム・ジャファル・サーディック・マザール〉に祀られている英雄イマーム・ジャファルが壮烈な最後を遂げ討ち死にしたという伝説は、この英雄の敵として最後の聖戦を懸けて挑んだ戦士たちの中に尼雅遺跡（精絶国）の住人たちの末裔が含まれていた可能性がある。それ故に歴史を辿り得る一切の痕跡は抹殺されたのかもしれない。

尼雅遺跡滅亡を考える場合、さまざまな要素が複合していたことは、多くの学者の認めるところである。すなわち、第一に言い得る要因は、タリム盆地全域の乾燥化、砂漠化が進んでいること。第二に、特に乾燥化、砂漠化現象が西域南道のケリヤ川、尼雅川、ヤルタン川、エンデレ川、そしてロプノール湖に於いて急速に進行し、6西紀までにはこれらの古代オアシス都市が滅亡しているという事実である。しかし、その中でも尼雅遺跡がもっとも早く滅んだ都市に属している。そこに尼雅遺跡の特殊性が存在することになる。第三に西域地方の歴史的影響によるものとして、長沢和俊教授によれば、「四西紀後半、蠕蠕または丁零の来襲により、忽焉と全員離散の運命に見舞われた」と、遊牧の民蠕蠕や丁零の来襲が直接原因だと推定しておられる。また、スタインも漢の武帝統治後中国中央権力が東トルキスタン地方から撤退したことによる影響の可能性を示唆している<sup>40)</sup>。第四に尼雅川の変化。この原因を主張するのは、スタ



インが最も積極的に取り組んでいる説である。この説を取り上げるにしても、以下の矛盾があることを彼は認めている。

この〔川の後退という〕現象について、地理学的理論が幾度となく繰り返された討論に従えば、中央アジアの広い範囲でゆっくり進行している共通現象の結果であることを理解しなければならないのは、もっともな事由であるかにみえる。しかし、この自然現象が、なぜ遺跡が再び〔いずれかの民族によって、居住地として〕使用されなかったのか、ということ完全に証明しようとすれば、それ〔広範囲に進行していった乾燥化現象の説〕について、当初〔住居を〕放棄したのは〔流水域の後退が〕突然であるからであり、しかもそれ〔乾燥化現象〕は、ゆっくりであったという〔両者の矛盾〕を説明していない。<sup>(4)</sup>

彼の主張は、中央アジアの広範囲で進行中であった乾燥化現象が、すべての西域地方でも共通現象であるはずにもかかわらず、尼雅遺跡では、流水域の後退が突然生じたのであり、両者の矛盾を指摘しているのである。スタインの時代には、大馬扎における古い岩盤が隆起していることは知られていなかった。現在は新疆地区全域に於いて石油や天然ガスの探査が国家プロジェクトとして精力的に推進されている。したがって、地質学の調査が精密に行われているので、この岩盤の隆起についてもかなり詳しく調査されているものと思う。ともかく、現在では中国名〈民豊興隆帯〉(日本名では〈民豊隆起帯〉)となる)として知られている。もし、この民豊隆起帯が尼雅川々床の水流に影響を与えているのであれば、非常にわかりやすく説明が可能になる。しかもスタインの云う水流が24km後退した現象に対する説明のみでなく、先述した尼雅川に見られる、多分長い年月をかけて尼雅川々床が西に傾き、さらに川も西に方向を変え、地下水流や森林も同様に西に偏る一連の現象、そして、最後に大馬扎地点で水の流れが突然に止まる、と云った現象を説明できるのではないかと考える。

しかし、筆者は地理学や地質学の専門的知識を持ち合わせていない。専門家によって尼雅川々床と民豊隆起帯の関連が進めばもっと真実が明らかになるときが来るかもしれない。

#### 注

- (1) 吉崎伸・近藤知子共著「(4) 93A10 (N.13)・93A9 (N.14) の調査」pp.96-99. (日中共同ニヤ遺跡学術調査隊編『日中共同尼雅遺跡学術調査報告書』第2巻「本文編(日本語)」99年10月発行。)
- (2) 日中共同ニヤ遺跡学術調査の経緯については、以下の資料を参照されたい。(i) 小島康誉「中日・日中共同ニヤ遺跡学術調査12年間の総括と今後」(日本沙漠学会誌『沙漠研究』第10巻第2号, 2000刊。); (ii) 1988年度~1993年度まで; 「第1章—2 調査の契機と経過」(日中共同ニヤ遺跡学術調査隊編『日中共同尼雅遺跡学術調査報告書』第1巻, 1996年刊。); (iii) 1994年度~1997年度まで; 「第1部第1章(3) 調査の経緯」(前掲『報告書』第2巻, 1999年刊)
- (3) A.Stein "Serindia" 所収。
- (4) 林梅村「漢代精絶国与尼雅遺址」『文物』1996年第12期, p.55 右欄, 135~左欄, 127; 浅岡俊夫訳「精絶国とニヤ遺跡」; 于志勇、阿合買提、熱西提「民豊県北石油物探発見文物紹介」『新疆文物』1998年第3期

- (5) 北方新遺跡調査については、「1993年尼雅遺址北方考古調査」及び「1993年ニヤ遺跡北方の考古調査(要旨) pp.73~81、図版一参照(『前同報告書』第1巻)同調査隊刊、1996年。及び「北方地区遺跡の調査」(日本語訳、本文編 pp.38~45)、図版四十三、四十四、四十五(図版編所収)参照(『同報告書』第2巻;同調査隊刊行、1999年)。
- (6) 参照「附表一 尼雅遺跡分布調査GPS測定一覧表」(前掲載『尼雅遺跡調査報告書』第2巻所収)。
- (7) Rapson and Senart “KHAROSTHI INSCRIPTIONS” Plate No.159etc. (OXFORD AT THE CLARENDON PRESS, 1927)
- (8) 『大正大蔵経』巻51「史伝部3」, p.945c
- (9) 『漢書』西域伝、(古典研究会刊『漢書』(二)列傳(下)951下)
- (10) 林梅村「漢代与尼雅遺址」(『文物』12・1996, p.55)
- (11) A.Stein; “Serindia” p.218, //.28-33
- (12) ibd. pp.218-219; 及び付録住居模式図“PLAN OF RUINED RESIDENCE N.XIV, NIYA SITE”参照。
- (13) ibd. p.218, //.29-p.219, //.8
- (14) 林梅村「漢代精絶国与尼雅遺址」(前掲載書 p.54 左行), 浅岡俊夫訳「漢代精絶国とニヤ遺跡」
- (15) 林梅村「漢代精絶国与尼雅遺址」(前掲載書12、pp.53-59)。浅岡俊夫訳, 同訳本。
- (16) N.14 住居址平面図参照(A.Stein “Serindia” 所収) →註(12)
- (17) 林梅村「漢代精絶国与尼雅遺跡」(前掲載書、p.55, left //.38-p.56, right //.5), 浅岡利夫訳, 同訳本。
- (18) 林梅村「漢代精絶国与尼雅遺址」(前掲載書、p.56, left //.15-17), 浅岡利夫訳, 同訳本。
- (19) 「1993年〈N.2〉住居址群の測量調査」(前掲載『尼雅遺跡報告書』第1巻, pp.165-168 所収); 付図「ニヤ遺跡 N.2 地点測量図」(『同報告書』第1巻)
- (20) 「図録編」所収の図版十七・十八・六十六 参照(前掲載『尼雅遺跡報告書』第2巻所収)
- (21) 「第三章(1) 93B4 (N.2) の調査」(前掲載書『尼雅遺跡報告書』第2巻, 日本文編, pp.46-61; 『同報告書』第2巻, 中文編, pp.42-54 所収)
- (22) A.Stein; “Ancient khotan” pp.312, //.1-7
- (23) A.Stein; ibd.p.312, //.7-35
- (24) 水谷真成訳『大唐西域記』p.406 (『中国文学古典体系』22 平凡社刊); 『大正大蔵経』51巻 p.945c
- (25) 水谷真成 ibd. p.406 注1.
- (26) A.Stein, “Ancient Khotan” pp.311, //.10-11 参照。
- (27) A.Stein, “Ancient Khotan” p.383, //.21-22
- (28) A.Stein, ibd.p.383, //.12-19, <Site that of a terminal oasis> の項参照。
- (29) A.Stein “ANCIENT KHOTAN” Vol.II; PLAN ‘XXVII’
- (30) Stein ibd.p.384, //.14-19 <Possible causes of abandonment of ancient site> の項参照。
- (31) スタインの改訂版ニヤ遺跡地図(“REVISED SITE PLAN of ANCIENT SITE BEYOND NIYA REVER”) 上で“ERODED DUNES WITH FREQUENT TAMARISK CONES” (“SERINDIA” 所収) などと表記したり、N.1 模式図(“PLAN OF RUINED HOUSE N.1”) 上では“Sand cone covered tamarisk” (“ANCIENT KHOTAN” 所収) と表記している。
- (32) A.Stein, “Serindia” 所収。
- (33) 参照; 「図録編」図版四十三の1および2(前掲載『尼雅遺跡報告書』第2巻)。
- (34) 参照: ibd. 「図版編」図版四十三の1, 2。および、参照: 「日本文編」(3) 岳峰; 于志勇共著「北方地区遺跡の調査」, pp.38-45; 「中文編」pp.35-41.

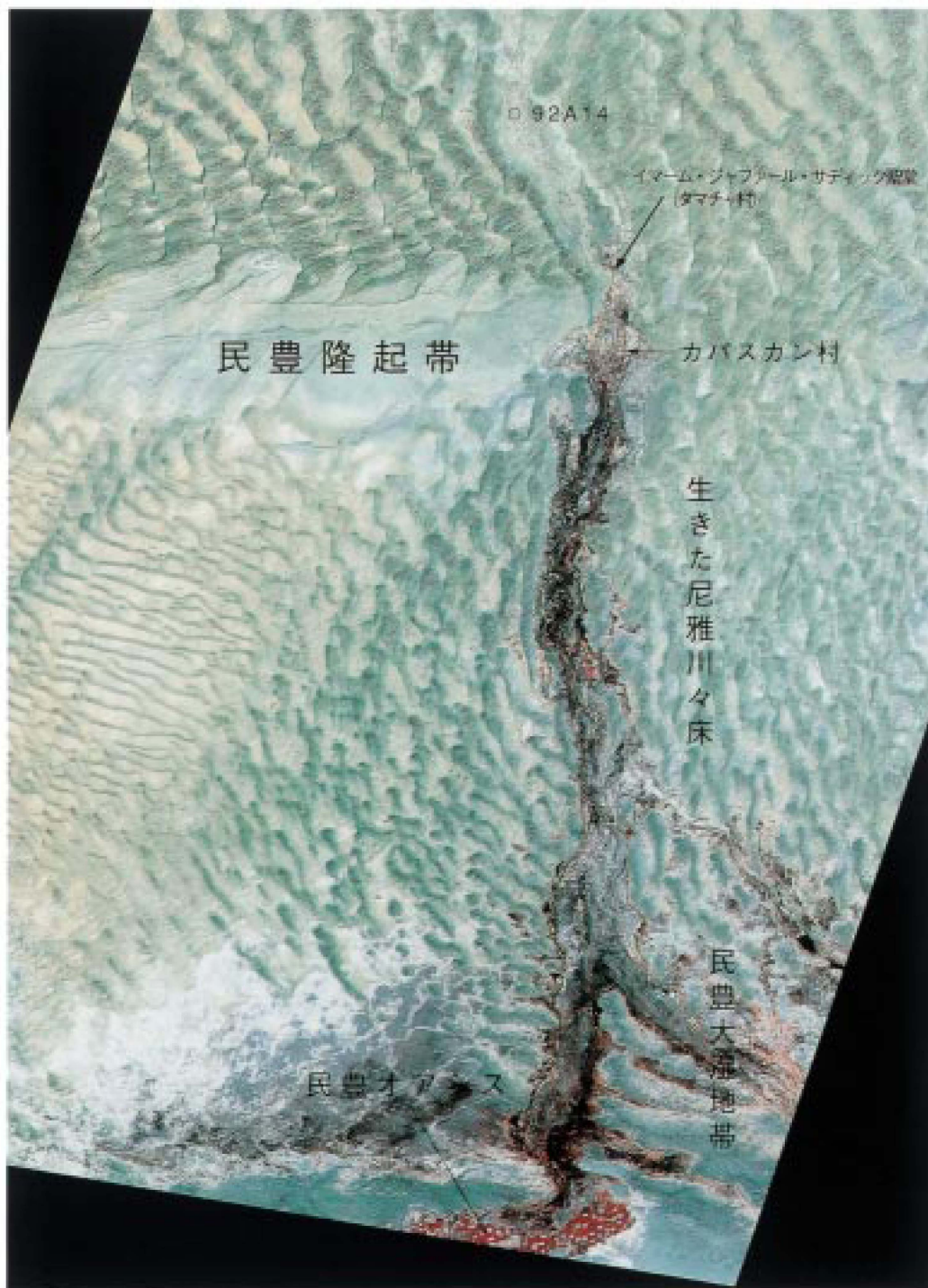
- (35) 伊東隆夫：「尼雅遺址木質遺物的調査」（『日中共同ニヤ遺跡学術研究シンポジウム発表原稿要旨』P.26）2000年3月20-21日開催。
- (36) 前掲載『報告書』第2巻「(3) 北方地区遺跡の調査」p.44。
- (37) A.Stein “Ancient Khotan” p.338, // 21-24
- (38) ibd.; Stein, p.383.; <Shrinkage of Niya river course> の項参照。
- (39) 『唐書』221巻「列伝」24（古典研究会刊・和刻本正史『唐書』（4）列伝（下）466頁上。
- (40) 長沢和俊『樓蘭王国史の研究』p.584。（雄山閣、平成2年2月刊）。
- (41) ibd. Stein, p.384.; <No direct archaeological evidence as to cause of abandonment> 項, // 25-28 参照。

[後記] この研究は平成11年度特別研究助成による研究成果である。

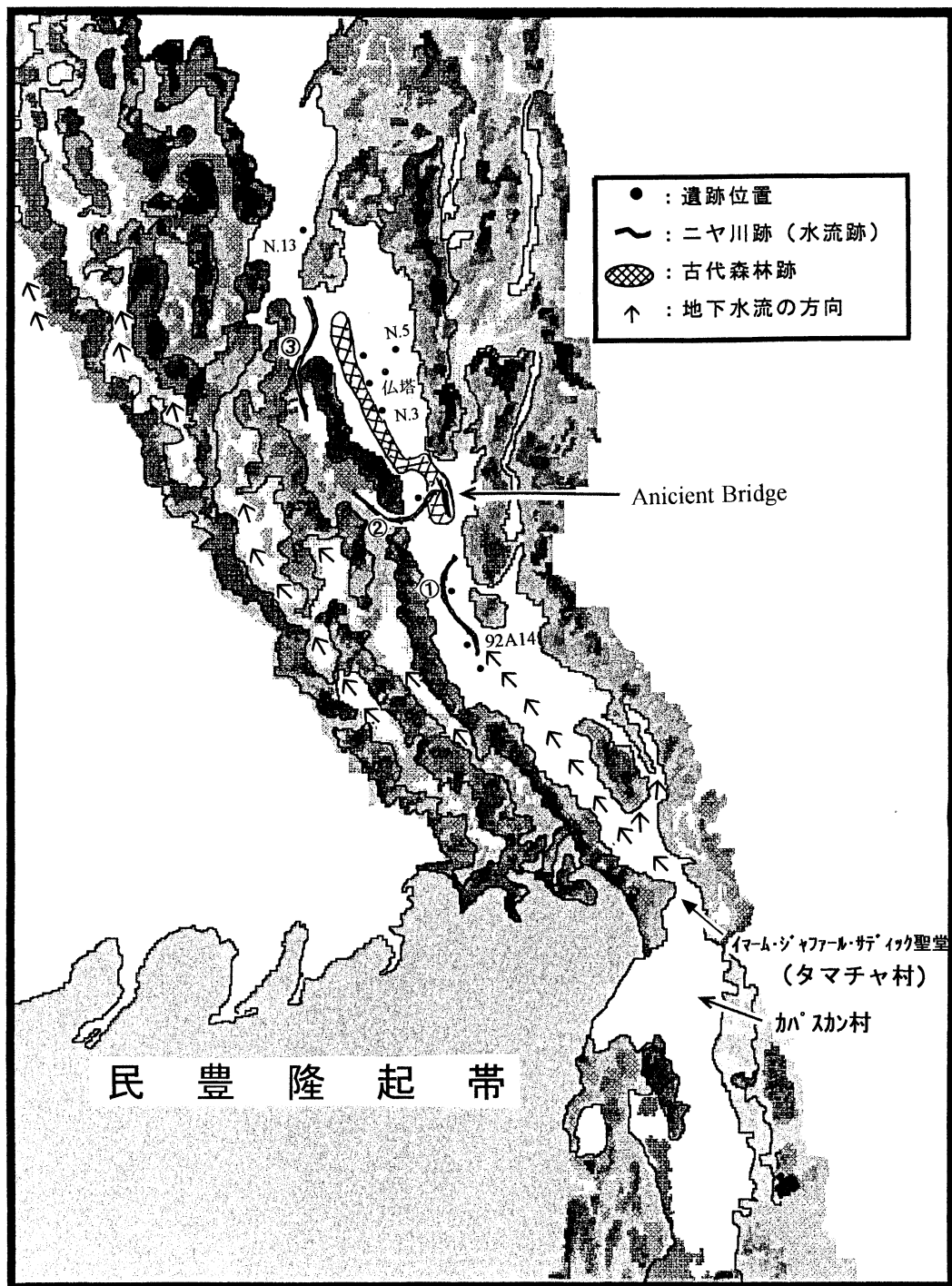
(さなだ こうどう 仏教学科)  
2000年10月18日受理



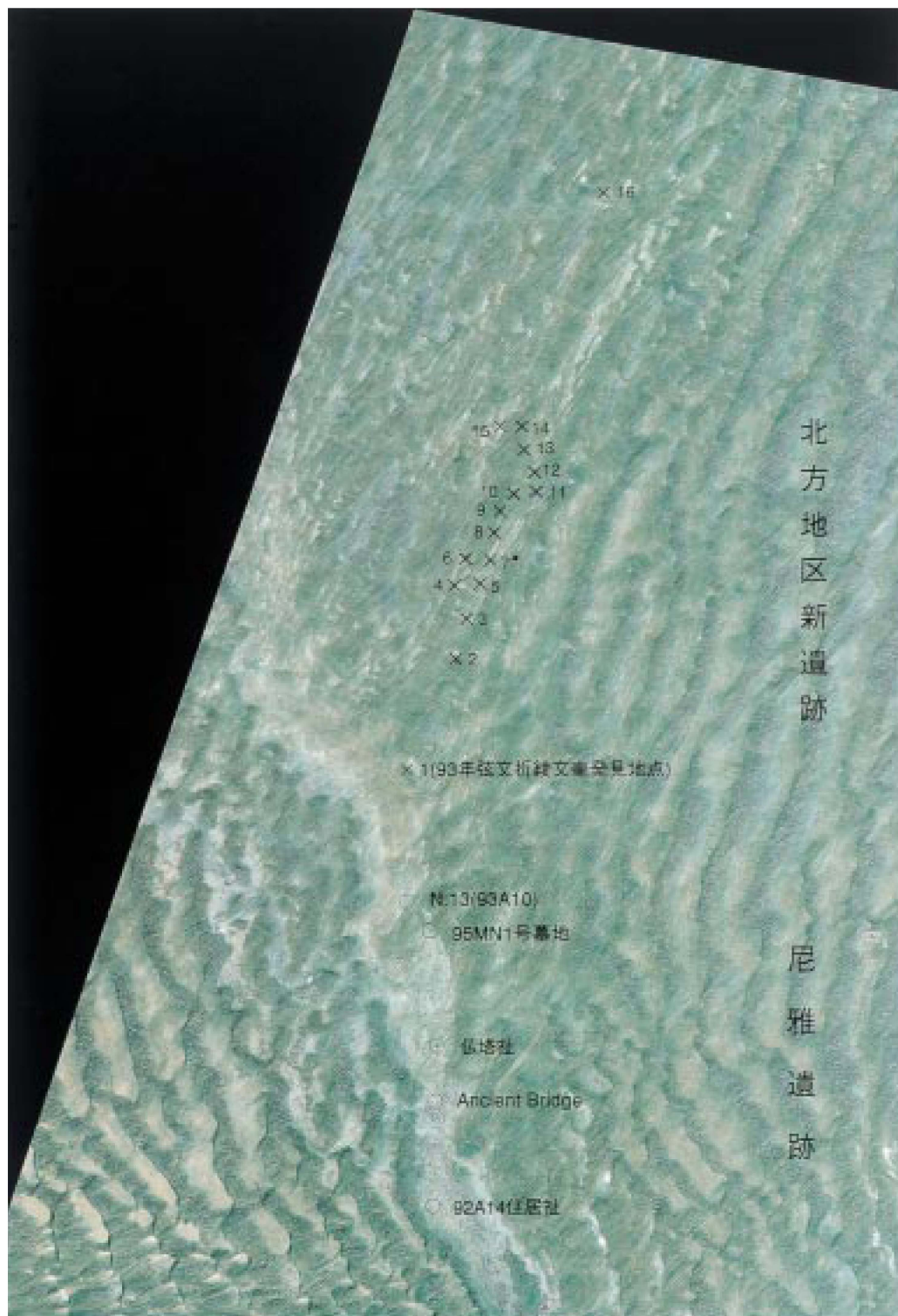
第1图 尼雅川々俯瞰图 (SPOT 卫星写真)



第2図 生きてた尼雅川々床と民豊オアシス、及び民豊隆起帯と枯死した川床



第3図 尼雅川々床上の地下水流・川跡・古代森林概略図



第5図 尼雅川々と主な遺跡配置（SPOT衛星写真より）